

縄文時代のイヌの埋葬

金子浩昌（国立博物館客員研究員）

東京美術「貝塚の獣骨の知識・人と動物のかかわり」1984年の著者

貝塚の発掘で、全身の骨格を残したイヌの埋葬をみるのは感動的です。ヒトの埋葬についても心に訴えるものが大きく、きびしい自然の中でよくぞ生き、その生命を全うしたと縄文人に対する畏敬の思いで接するのですが、イヌたちに対しても同じです。一般にイヌの寿命がどの程度なのかよくわからないのですが、縄文時代では遺跡から知られるイヌの遺骸からの推定では、長くて数年、多くの例では1年あるいはそれにも至らぬうちに亡くなっていると言われています（茂原信生氏らによる宮城県気仙沼市田柄貝塚のイヌ遺骸調査1986年）。もちろん、もっと長く生きたことを推測させる例もないわけではないのですが、稀なことであったと思われる。飼イヌの短命であったことについては、人による過酷な狩猟のためといった説明もありますが、この時代の

狩猟は日々山野で鳥獣を追うということではなかったのではないかとこれは当時のイノシシ、シカその他の鳥獣類の推定される捕獲頭数は年間どれも数頭前後と考えられることからですが、むしろイヌ飼育の日々のきびしい条件があったためではないかと思われ、人との生活を余儀なくされたイヌたちの寿命だったのではないのでしょうか。イヌたちの好む食べものが豊富だったということも考え難いことです。先程ものべたように捕獲できるものの数が少なかったからです。イノシシやシカの骨の端がかじられているのは、イヌたちのやった痕です。しかし、基本的にはイヌが埋葬されることは、他の獣類とは異なるところです。終生みちかにかいたイヌたちの死に対して、短かった伴侶の生涯に万感の思いがあったからではないのでしょうか。

向台貝塚28号建物址出土のイヌ遺骸



PL.31下段の簡単な骨格名称

1、環椎、2、軸椎、3～5頸椎、6,7胸椎、8～11、腰椎、12、左下顎骨片、13、右上腕骨、14、左上腕骨、15、右橈骨片、16、左橈骨片、17、右尺骨片、18、左尺骨片、19、右腸骨片、20、右坐骨片、21、左坐骨片、22、23、右大腿骨片、24、25左大腿骨、26左脛骨、27、左踵骨

このイヌは歯牙の咬耗はほとんどなく、若い個体である。四肢骨は小さく、小形犬といわれるなかでももっとも小さかったと思われる体つきであった。

これまで遺跡の発掘などで、ヒトの埋葬址に遭遇すると回向、讀経などが行われましたが、イヌに対して、そしてさらには破壊された遺跡に対して当事者はどれほどの思いを込めたでしょうか。こうした思いの欠如が、イヌたちに対する単なる思い付きの話を生み出すことになったのではないかと思うのです。

このイヌ遺骸は昭和42年（1967年）に千葉県市川市で発掘されたものです。骨格の状態は、ずっとおかれて1999年市川市立考古博物館の研究調査報告第7冊中に掲載されました。

この埋葬犬の発見と発掘の経緯については、「一括のイヌ」とのみの記載で、他に記録されていませんが、骨格にまとまりのあることから、埋葬遺骸であったことはまちがいないでしょう。しかし、頭蓋は全くなく、四肢骨の破損は痛々しく、また骨格で欠けている部分があり、またその破損が新しいことから、発掘時の損傷によるものです。もともとは埋葬された遺骸であったのが、ごく一部のみを残して、かなりの骨格が失われているわけです。しかし、下顎骨などは古く破損している痕跡もみられ、埋葬後にくずれ、骨格を確認するのが困難な状態であったことも考えられます。土中のぜいじゃくな骨格を損傷無く発掘することは大変難しいことです。ましてその位置がくずれたりしていると、骨を傷つけたりするものです。

本例に限らず多くのイヌの遺骸の出土の状況をみると、ほぼ完全な出土というものはむしろ少なく、骨格の不完全なことの方が多いのです。当初埋葬された遺骸の骨格がくずれるのは、その後の埋葬地周辺の改変によって元のままでなくなるのです。この28号建物址出土のイヌ遺骸は、幸いにしてまとめて採取することができたので一括して扱うことができましたが、これが個々ばらばらに収納されたり、他の遺物が混入したりすると、区別が難しくなってしまうところでした。骨格が別々に取り上げられれば、散在するイヌ骨という扱いになってしまうのです。このような検出例をきちんと記載することが重要になってきます。後晩期になるとイヌの埋葬例も増えますが、遊離、単独出土のイヌ骨もいっそう増えることも当然考えられ、実際にその様な骨格が増えます。これらは解体されたイヌの部分骨ではなく、埋葬骨の遊離した一部であったのでしょうか。イヌの骨格に損傷の例が皆無というわけではありませんが、その理由についてははいねいに考えねばならないでしょう。まして、遊離骨が多いからといって、イヌの解体があったなどとはいえないわけです。

イヌに限らず、動物遺体について充分注意された調査と記録が必要となるわけですし、結果についても現場の状況、遺骸の実際を見極めた上での考察が必要になるのでしょう。

(2008. 01. 10)



アフガニスタン、マザリシャリフにて（五味蔵）